

ともく體格をやり由是古語書の名も
 所収るも願は編纂は齊身と鄰乃
 俗語あり楚辭は荆人の方言を収
 ても朱子又詩經を序するに俗語を
 かも用ひて序するに俗語を収るや
 此も能要彼後を傳く世に或るも
 とくふり苟も俗語を収るも其を
 新を編る癖を揮るも是は古語に

義小説のふとて俗語をあつて
 且俗語は必新古に俗語を
 其あるも其志のなれは人の心を
 以てしるも其味を解くも此
 事辭能いや一書に俗語を収るも
 其心もその心も其心も其心も
 文化七年唐平林鐘義宣俗語に
 於其心も其心も





山崎の事
 ありしを
 今も
 思ふ
 事
 あり

山崎の事



三

魯作官或反

歌書
 李も軍
 高し士
 錦山
 録支考
 夕

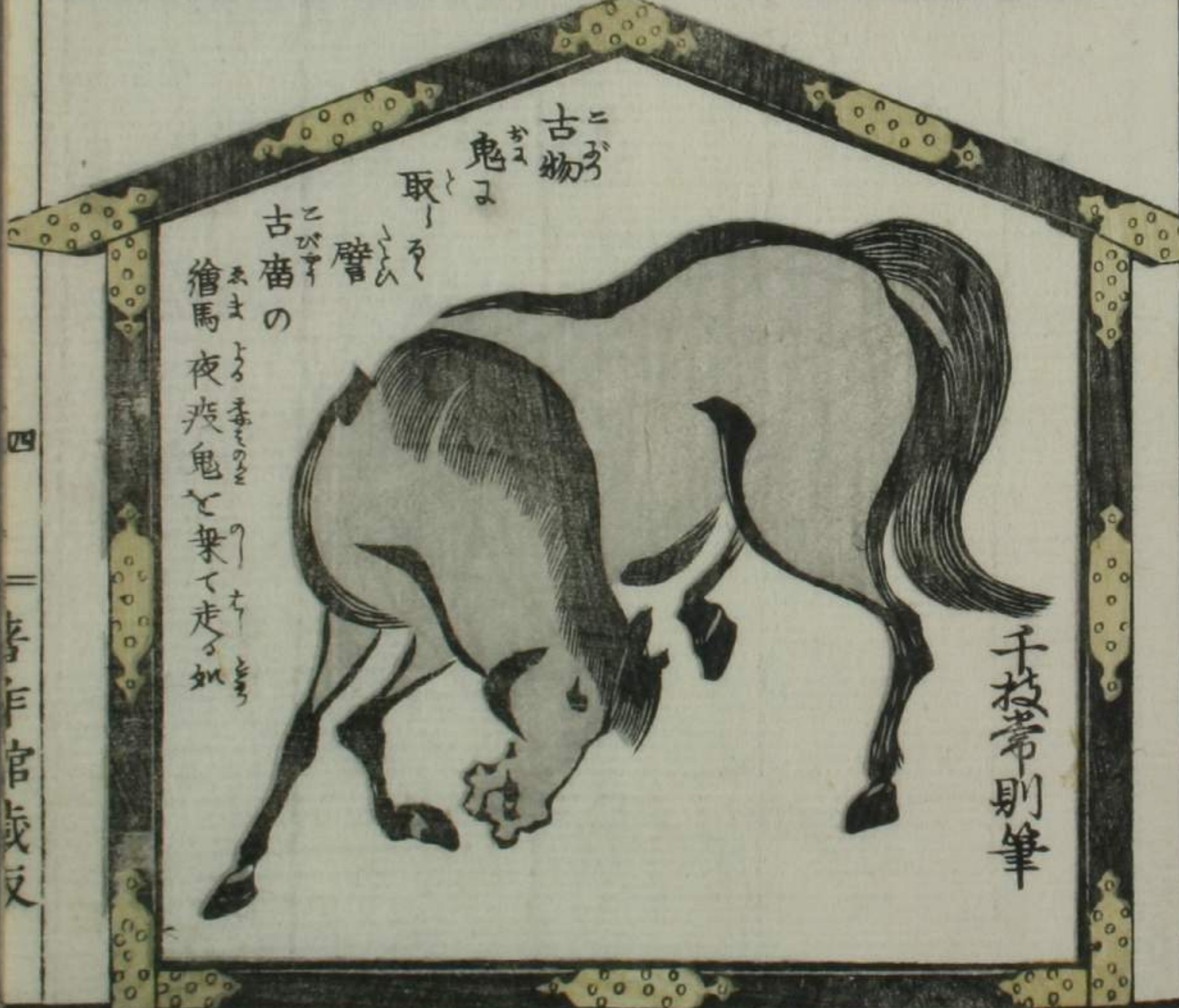
質屋産



魯作官或反



質屋



古物 鬼 取
 古物 鬼 取
 古物の
 倉馬 夜疫鬼と乗て走る如

千枝常則筆



古物 怪 石像地蔵 妖
 石像地蔵 妖
 旅客 如

著作舎

六

四

官

て。夜の寐られせ。と難經の。四十六難又説れり。寶樹の今茲五十六歳。夜宿られぬ。本來の。老人質氣といひか
ら。もつが病びの不寐病。人いたのまぬ金の衛て。うつらくと睡られず。留つくやうなる門の狗。一馬場賣る
天井の鼠。枕敷て。夏が宿乍ら密と起。やつと引提る鐵網の。手燭と袖もてうち掩ひ。納戸客房。庖厨まで。二遍
廻れば怪しいか。質庫のかた又當て。もの、聲こそ聞えよけれ。その盜賊よ。と胸うち騒ぎ。臥るる主骨小厨等と。
呼び覺さばや。と思ひしが。鎖の響のごとくある。賊の入るべきやうなし。まづ爲体を見定めんと。流石の老功。
氣を鎮めて。怪みながら驚か。足と懸息と籠。庫の戸口へ立よりて。網戸の目よりさ一覗け。二階から洩る燭臺
の。臘燭早々として白晝のごとく。人影圍坐して。うち相譚る物のいひさま。盜賊の似ざりけり。寶樹のつくづく
とうち聞て。亦つくづくと思ふやう。南朝第一の博士ありける。北畠准后親房卿の。宣ひ一こそあれ。白鼠を昏
時。丘陵の間又見て。その出入せる所を見。中必金ありと。白澤圖又記し。又黄金の氣の赤し。夜の火光あり。
又白鼠ある。と本草もこれといへり。このみな金の妖精もて。錢も積と久しければ。或の白鼠と化り。或の青蛇
となり。或の黃鳥とすると。事類賦の載さるける。昔金錢のみあらんや。幹幹が盡る馬の。鬼と乗せてよく走り。金
岡が盡る馬の。夜菽戸の芳宜と食。伊勢國の古席の給馬の。瘦鬼と乗て走り。唐山嘉禾門橋の石刻孩兒の。夜出て人
を劫し。夏が相摸路なる。石地蔵の化て旅客は飲られり。されば大刀。衣裳。古書畫の類。年を積と久しければ。そ
の精進して崇あり。しからざれば鬼の爲。必奪ひ去らると。郎瑛の怖さりとて。過去と引き。未來を談じ。宣ひたる
よし傳え聞け。これも正しく質物の。妖怪もてやあらんせらんと。心つくほど毛骨さち。怖さも怖し。見ささも見
し。腰をる錢と脱出して。網戸の扇と。密と開らさ。塵芥落の。籠子より。彼首は首と瞻仰。五十目掛の臘燭と。

大燭臺四五本へ。そげもなく點一つ。老るあり。弱きあり。和風俗漢様をとり。或の武者態のいかめしげある。
或の美婦人の匂やかある。商旅の美衣被る。秦又入らんとする。呂不韋かと思れ。文屋康秀が歌膝も似り。
薪負る山人の。花の蔭は休める。大伴黒主が。歌を詠るまや。とよく見れば。朱買臣が讀書も似り。古往今來か
一かべて。日本唐山の大一坐。人かと思へば人あらず。冤鬼かと思へば。冤鬼あらず。みなこれ年來この庫。籠
る諸方の道具質が。假し形を顯して。かこれ。が世と慕み。憂身を語り慰むあり。現も物の執着の。有情も
出て。無心も入る。古き女の小袖と買て。その袖口より細やかなる。手をさし出してうち招くと。眼前見しといふ。世
の怪談も誑が。いかなること語ふやらん。よく聞ばや。と踏かくる。大和檜木の管階子。軋ると彼所へしられし
と。二段階の吐息。二段階の又躊躇。三段四段と漸やく。欄干の蔭より頭を擡て。と見れば上坐は一箇の老
翁。鶴衣は番袴して。讀書先生と稱するあり。この何物ぞ。と熟視れば。和細工の唐木造り。舊の主こそ定かあらね。
裏は延喜の年號記せし。その容異形の款案なり。煤びし隨は黒く手摺れて。幾許の書を讀けん。とその時代さへ思ひ
やられて。この席上は第一番の。博士と見ゆる物體なり。

第一 讀書先生の款案

そのとき讀書見臺先生。席を信と見わたして。乾びる咳し。往古學校の盛ありし世。大學博士あり。音博士あ
り。その後又。文章。明法。陰陽。曆。算。周易。漏刻等の諸博士を立られて。その道を傳へ。その業を受しかば。俊傑の
學士いと多かり。その比の某も。菅江の名家と膝とまじえ。日書生を尊敬せられしが。學校廢れて後。且く少納
言入道信西の家あり。かくて保元の擾亂。人の心猛々しく。三綱既亂れて。相語ふべき友もなく。村儒も



音吾質屋直

三

唐作館蔵反



音吾質屋直

三

唐作館蔵反

寄宿して。多くの年月を過せし。いぬる延元のとしめ。南朝の博士。讀書翁と伴れて。吉野の皇居近くをれば。殊更
 鍾愛せられて。月々六齋の講席を缺せ。その家三世の重寶たりし。當主の甚しき墮弱も。よて。手習學問大嫌ひ
 家公の世話をやき死す。死れて一年。つや立ぬ。大酒を飲出し。類をもつて聚る友だち。よれば遊女の品定して。
 飲と買と遺ひ足らね。家傳の藏書を一部售て。三方金なくある智恵を出し。經籍史傳。歌書雜書。和漢の珍書い
 たづら。紙魚の肚を肥そのみ。折々披て見るところが。何の事とも譯らね。唐宋名家の法帖。芝居の番附。ま
 が老と思ひ。延喜天福の詠草。熟妓の艶簡。はと嫵から。多くの紙屑同様。賣もの、損、買もの、得、缺本の佛
 書の消壺の蓋と張らきて。火宅と脱ぎ。古板の方書の炮爐。よらきて。灸て黄ならしむるに至り。盡みたる孟子の
 絨めをとなされ。戸の節孔を塞ぐ。終りて。鎖關隙の一句。遺。彼書を焼き。儒と抗よと聞えし。秦の始皇の惡政
 さら。易經曆書の殘せし。驕奢を省き。衣食を薄く。年と共に積貯。父祖の藏書。淫酒の爲。一部も遺さ。沽
 却これ。殘るの。身只ひとつ。いくたびが道具屋の。手は遞らんとたりしが。これ正しく家公の像見。と。肩劬
 勞様が涙ととも。辛じてどり留め。腰巻も。や崩さ。か。りし土藏の棚へ。あけら。しより。日待の茶番。年忘きの。
 素人淨瑠璃の見臺。調寶がらる。朽をしさ。宋人の章甫と。楚人の冠。よとる。果。質屋の庫住ひ。罪
 かくて。練練の恥も。暗主。仕し身の不覺。各位の心の中さへ。推量ら。て痛し。と。苦り。さつて。いひ。け。ば。衆皆。頻。よ
 嘆息し。現。先生の宣ふごとく。實。い。て。身。の。さ。い。が。え。といふ。凡。夫。の。手。前。勝。手。先。祖。の。千。辛。万。苦。一。て。組。立。ら
 せ。一。家。庫。所。領。と。懷。手。一。て。取。る。子。孫。の。徳。も。なく。能。も。な。け。き。と。不。自。由。な。ら。ぬ。洪。福。と。洪。福。と。思。ひ。も。の。け。き。淫。酒。の
 爲。よ。得。の。さ。寶。と。忽。地。失。ふ。大。愆。の。所。謂。無。愆。よ。ち。の。さ。ん。寔。人。の。こ。ろ。ば。の。り。お。そ。ろ。し。き。もの。の。わ。ら。じ。唐。山

の戦國のとさより。と。その子。を。質。と。て。敵。へ。遞。せ。し。も。多。の。る。に。大。日。本。の。上。古。の。人。の。こ。ろ。淳。朴。よ。し。て。
 人。質。あ。く。もの。の。り。し。よ。保。元。平。治。の。播。亂。よ。り。親。子。の。間。で。も。兄。弟。で。も。な。か。く。も。つ。て。由。斷。せ。せ。壽。永。の。し。め。木
 曾。服。の。その。子。志。水。冠。者。と。枉。て。鎌。倉。へ。質。入。り。又。元。弘。の。三。年。め。足。利。の。の。三。男。千。壽。王。を。質。と。て。相。摸。入
 道。へ。遞。興。せ。し。以。來。庶。姓。顔。色。が。見。る。く。な。る。と。人。質。あ。い。て。遺。練。せ。ぬ。大。將。の。稀。な。る。べ。し。と。い。へ。榮。枯。得。失。の。人。間。の
 常。なる。よ。質。屋。と。い。ふ。もの。世。も。あ。く。の。金。錢。の。融。通。絶。て。貧。乏。か。く。と。よ。か。も。あ。ら。じ。人。質。と。道。具。質。と。品。こ。そ。か。は
 れ。俺。們。の。主。の。先。途。よ。つ。た。る。忠。臣。世。々。の。史。籍。も。載。ら。き。て。芳。し。き。名。を。留。む。べ。き。よ。可。愛。い。子。で。も。質。あ。け。ば。衣
 類。雜。器。の。何。と。も。思。ひ。を。百。も。餘。計。と。借。ん。ど。て。功。者。の。主。管。を。口。説。の。み。受。戻。を。日。の。遠。慮。せ。せ。鼠。穿。の。兩。指。と。之。し。め
 が。ら。瑕。物。よ。踏。れ。う。へ。で。推。曲。ら。れ。厄。限。果。て。世。も。出。て。も。質。の。流。れ。と。賤。め。ら。る。過。世。い。か。なる。惡。報。そ。や。烏。の。頭。の
 白。く。なり。馬。の。額。へ。角。の。生。て。も。か。く。ま。で。利。足。が。炭。で。の。音。へ。と。返。る。日。の。わ。ら。じ。嗟。夫。朽。と。し。や。と。み。な。も。ろ。と。も。よ。
 聲。ふ。り。立。て。發。憤。れ。ば。讀。書。先。生。も。涕。う。ち。か。み。その。述。懷。の。理。り。なり。各位の宣ふごとく。實の身のさし替と。いふ
 に。善。惡。二。つ。あり。清。貧。に。去。て。世。に。零。落。れ。親。の。爲。主。の。爲。よ。金。と。の。へ。ね。ば。か。な。い。ぬ。と。と。て。有。べき。物。と。沽。却。手。ば
 な。し。か。た。き。什。物。の。且。く。質。入。さ。る。と。も。恨。む。べき。と。に。あ。ら。ず。淫。酒。の。爲。に。身。の。皮。剝。白。徒。の。品。か。は。り。て。か。ゝる。忠
 孝。信。義。の。人。の。年。中。質。屋。へ。奉。公。し。て。も。文。人。の。方。策。を。售。ら。ず。武。士。の。腰。刀。を。質。に。置。す。これ。その。本。を。去。れ。ば。なり。そ
 の。本。亂。れ。て。末。を。さ。さ。る。の。あ。し。和。漢。の。寶。い。づ。れ。の。あ。れ。ど。佛。法。僧。の。三。寶。も。ま。した。る。書。籍。の。尊。き。事。い。ふ。も。な。か
 く。疎。之。大。約。盜。賊。の。目。か。く。る。もの。第一に。金。錢。第二に。衣。裳。第三に。太。刀。第四に。銅。鐵。第五に。雜。具。ある。べ。し。晝
 寐。の。由。斷。を。見。て。み。て。乾。した。る。洗。濯。結。絆。を。は。づ。し。水。入。口。の。開。た。を。見。入。れ。て。動。す。れ。ば。茶。釜。を。外。一。茶。罐。を。さ。ら。ふ

畫爲のあれど。一帙五圓金の唐本が。鼻の先へ投してあつても。方策のみ扱て走る。盜賊のいと稀あり。よしやその。價を知りて盜むとも。珍書の藏書の印あれ。これを去るに便あり。信の道に入るのみならず。俗のさら。賊でもとらぬ。人の寶とすべきもの。經籍史書にとめたるに。かゝる寶を寶とせざる。寶を知ぬ迷ひ。將武夫の寶とするもの。弓馬六具の武器に過す。まかれども文に暗ければ。眞の弓とりといわれず。商賈の寶とするもの。四方雲圖の君子なり。まかれども算筆に疎ければ。一ち日も世にたられず。武士の學問あり。商賈の商賈の學問あり。士農工商のれ。が。家業によつてよく身と脩め。行ひを慎むもの。聖人の徒といふべし。故いかにとなれば。武夫の弓馬劍法。農夫の時をたがへずして。よく耕一耘も。山妻の蚕飼して。よく績ぎ織織るも。番匠の規矩準繩も。よく柱たてをさるも。商賈の算盤取て。その本錢を減さるも。みなそれ。聖人の。教玉ひ。こにかし。かゝれば人間日用の所作。悉く儒の教あれ。出るとして戸よりさるなく。入るときて道よりさる。な。家來の主を敬ひ。子の親を嚴び。妻の夫を冊き。朋友の信を盡し。長者の坐をゆづり。少きものを憐み。かづけ。嫁とり婿入の式三獻。年賀追善いへばさら。飯碗の左。擧筋と右。採と迄。みな聖人の教よつて。禮節の端くれを去りながら。多くの聖人の遺徳と思ひ。亦是天地の。萬物を化育せれども。萬物の天地の徳を去ら。親のその子を養育せれども。その子の却父母の。恩徳を思ひざるが如く。普く徳と布ながら。その徳と徳とせ。これと名つけて仁といふ。まかる人も。井の底の蛙はひとしく。大海の濶さを去ら。三尺四方の井戸側。推當て。大海の濶さを推量り。僅に四書五經の。素讀とせませしものを見て。こや學者とよら。その概あるを見て。論語よみの論語を去ら。冷笑ふ。論語讀の惑ひ。論語の寔は讀易く。論語の信は解し難。古

注集注いづれのあれど。なほ訛舛を脱れ。よく論語と讀もの。道學成就の人といふべし。これを去ると難といへども。學べば則難から。心の理義の判者なり。然れども學ぶ。その心の濁り。まゝ濁ると。理義は暗し。眼の黑白と照と明鏡。まかれども學ぶ。その鏡曇る。鏡曇ると。黑白を辨しがだし。耳の聲を合せる律管あり。まかれども學ぶ。その管塞る。管塞ると。五聲通せず。口の味いとまる庖丁。まかれども學ぶ。その口濁る。口濁ると。五味と。これを兼るもの。心なり。かゝる故。心。まわれざれば。見れども見え。聞けども聽えず。食へどもその味いと。彼鳥獲が牛と留め。親衛の船を負ふの。臂力ありといふといへども。學問の力を借られ。情と割。慾と禁るとの。こをによりてこれを見。學問の力あると。万夫不當の勇士は勝。悲。世俗の口管。情慾は感。利と。道に入ら。書籍と捨く寶とせざれば。吾儕をしてかくの如く。姜里の囚と。同病の相憐み。同氣の。かあら。年來ひとつ質庫あり。おら。腕競して過さんより。おの。懐ひを述玉。こ。とやら。さばひとあるべし。少許醉とき。醒る。近し。恥と。義。遠の。い。や。雨夜の品定め。遊び玉へ。と信。扇と。胸の。うらあふげ。み。有。理。と。雷。同。せ。り。

第二 友切丸

そのとき忽地一箇の壯佼。それまづ思ひを述べ。と呼つて。奮然として跳出。衆皆驚きてこれを見。古金襴の袋小袖。金襴輪の袴を穿。銅金造のめし。赤銅鞮子。丸鞋の帯と締。重鎧の腹巻。南蠻鏡鐸の刀緒を懸。金無垢の鉢。おなじ色の。意氣揚々たる形勢。問。ね。と。名。と。ま。る。勇。士。の。骨。相。こ。れ。箱。置。の。友。切。丸。五。幕。會。談。

の名作や。と感せぬものなりけり。彼壯俊いあさりと勝で。隠るる目貫糸をそぎ。まばら焼刃を切りて。句ひのごとき息と吻き。世も朽をしきともあるな。これに往昔建久四年。時も五月の雨夜の符倉。曾我五郎と伴きて工藤祐経を撃とつる。時宗秘藏の無銘の太刀。まあるにいつの程よりの源氏の重寶薄緑と呼ぶ。又友切丸の名を負せらる。故に一旦紛失して。鬼王等も苦を被るといへども。彼等みな悞て。友切丸とて索しゆる。名の錯悞の急よに出せ。今に至りて。薄緑と呼ぶものこそなげき。まあるまらぬもおしなべて友切丸と稱ると。遺恨の至り。言語同断。このとわりを説わがさる。いよく。名と訛さる。折もあらざ。と思ひし。今夜の團坐のねがふも幸。まつ刃が素生と譚るべし。耳ふり立て開玉へ。抑五十六代の聖主。清和天皇より四代。左馬介源朝臣。攝州多田。在せしかば。世の人多田滿仲と稱せ。まあるも滿仲はやくより。思ふ旨あるまよつて。有一年筑紫の鍛冶を召來して。二ツの太刀と造ら。玉ふ。件の鍛冶の名譽のもの。八幡宮へ七日社參し。心願。願丹精を抽つ。凡六十日として。最上の太刀二口を作り出し。長サおの。二尺七寸。滿仲やがて有罪のものを。切せてこれを試み玉ふ。一ツの太刀の罪人の。鬚を加へて切よ。け。鬚切とこれと名つけ。又一ツの太刀の。膝を加へて切よ。け。膝丸と名づけける。かくて滿仲の嫡男。頼光朝臣の時。至て。美田源次綱。有一夕。一條大宮へ使として。彼鬚切を主と借りて帶たりしかば。不慮。この太刀とつて。鬼の腕を切おとし。よりて鬚切を更めて。鬼切とぞ呼しける。まのころ頼光病床。膝丸の太刀をもて。山蜘蛛を砍玉ふとあり。よりて膝丸をも改名して。蜘蛛切とぞ呼しける。さてこの二口の寶刀。滿仲より六代の孫。六條判官。爲義が家へ傳へたりける。有一夕。彼二ツの太刀。吼ると酷。鬼切が吠たる聲。獅子の鳴。似たり。又鬼切を改めて獅子の子と名け。蜘蛛切が吠たる音。蛇

の泣。似たりとて。吠丸と改名と。さる程。爲義判官の彼吠丸と塔引出として。熊野別當教眞も與へし。ま。か。る寶刀と教眞が。身も著べき。ま。あ。ら。せ。と。て。權現へ進ま。さ。り。ける。元暦のま。ま。じめ。範頼義經鎌倉殿の代官と。て。平家を西海。討。の。日。熊野別當。増。む。か。し。教眞が爲義より得たりける。吠丸の太刀と。り。出。て。義經へ贈りしかば。義經殊。よ。ろ。こ。び。て。亦。吠丸を更。て。薄緑と名。つ。け。たり。これ。熊野の山の。緑。と。ま。けて。出。た。れ。ば。薄緑の名を負せし。かくて義經の舍兄頼朝と不和にあり。大功ありといへども。鎌倉へ入られず。空しく腰越より追かへされて。京師へのぼるとき。心願の旨ありて。彼薄緑の太刀と。箱根權現へ奉納。ま。た。り。ける。建久四年五月廿八日。曾我五郎時宗。父の仇。工藤祐経を撃んとするとき。箱根山へいゆきて。別當行實に。外。か。ら。身。の。暇。と。告。し。か。ば。行實もはやその氣色を猜して。彼薄緑の太刀をとり出で。時宗に與へしかば。ま。の。太。刀。と。も。て。か。も。も。隨。ふ。仇。人。を。ま。撃。ち。たり。ける。その。ち。薄緑と。バ。鎌倉へ召れたるよし。太平記の劍の巻にいへり。この劍の巻といふものも。舊。の。太平記の首巻に。い。わ。ら。ね。と。古。書。あり。もしこの説。ま。ま。た。が。ふ。と。き。箱根の別當行實が手より。曾我五郎が獲たる太刀の。滿仲のとき。はじめ。膝丸と名。つ。け。玉。ひ。し。を。頼光これと蜘蛛切と改名し。爲義のとき。亦。吠丸と改。た。る。と。義經亦。薄緑と名。つ。け。たるものにして。友切丸に。い。わ。ら。ず。友切丸からぬ太刀と。友切丸とて。春。毎。に。素。る。か。ら。出。か。ね。て。これ。が。爲。に。子。と。棄。て。賣。苦。心。看。官。の。臍。を。斷。ち。る。べ。し。と。て。彼。友。切。と。い。ふ。太。刀。の。い。か。か。る。物。ぞ。と。云。に。前。に。演。た。る。獅子の子の別號。爲義判官。増。か。り。ける。熊野別當教眞に。吠丸と。ら。せ。し。か。ば。一。具。持。た。り。ける。太。刀。一。ツ。失。く。片。手。さ。き。や。う。に。覺。け。れ。ば。播磨國より。よ。き。鍛冶と召上。獅子の子を本にして。少しも違。い。ず。造。ら。せ。ら。る。最。上。の。太。刀。に。けれ。ば。悦。玉。と。限。あ。り。目。貫。に。烏。を。作。り。た。れ。ば。小。鳥。と。ぞ。名。つ。け。る。こ。の。小。鳥。の。獅子の子より。二。分。ば。か。り。長。か

十四ノ系に教
熊野別
當長快
その子
湛増の
爲實の
子と注
せり

りけるに。有^あ一日二ツの太刀を抜^ぬて。障子へよせかけて置^おたりけるに。人もさむらぬに。からくと倒^たるゝ音聞^きえけ
れバ。いかに太刀を轉^まびぬる。指^さじやまつらんとて。とり寄^よて見玉^{みたま}へバ。日來^{ひらい}二分ばかり長^{なが}しと思^{おも}ひつる小鳥^{こどり}カ。
かちやうになりにつれバ。不思議^{ふしぎ}かち。さるべきやうやある。截^きたるか。折^やたるか。とて。先^まを見れどもさるもあし。怪^{あや}
みて鞘^かを見るに。目貫^{めぬき}折^やてあかりけり。抜^ぬて見^みれバ。鞘^かの中^{うち}二分ばかり新^{あたら}に切^きれ。目貫^{めぬき}を突^つ抜^ぬてさがりたりと見え
たり。これ一^{いち}定^{ぢやう}獅子^{しし}の子^こが切^きたるよとこゝろ得^えて。獅子^{しし}の子^こと改名^{かひな}して。友切^{ともきり}と名^なづけけり。まかして後^{のち}に。爲^た義^ぎ
この太刀^{たち}を。嫡^{ちやく}子^し義朝^{ぎぢやう}に。譲^{ゆづ}り與^{あた}へられたり。と亦是^{また}劍^{けん}の巻^{まき}にいへり。かゝれば友切^{ともきり}丸^{まる}の初^{はつめ}の名^な。鬚^{ひげ}切^きといひつる
を。頼^{より}光^{みつ}のとき。鬼切^{おにきり}と改名^{かひな}し。爲^た義^ぎ又^{また}。獅子^{しし}の子^こと改^かめ。更^{さら}に友切^{ともきり}と名^なづけけたるあり。保元^{ほげん}平治^{へいぢ}物語^{ものがたり}東鑑^{とうかん}等^らと按^あず
るに。友切^{ともきり}丸^{まる}のと見えす。東鑑^{とうかん}。文治^{ぶんぢ}元年^{げんねん}九月^{くわがつ}十九日^{じゅうくにち}の條^{じょう}。法皇^{はうわう}御護^{ごご}の御劍^{ごけん}。去年^{こぞ}紛^ま失^しす。去^さる頃^{ころ}。江判^{えはん}官公朝^{くわんくわうぢやう}。こ
れを求^{もと}得^えて獻^{けん}上^{じやう}せしむ。風聞^{ふうもん}するの間^ま。今日^{こんにち}二品^{にひん}頼^{より}朝^{ぢやう}。御書^{ごしよ}をもつて。公朝^{くわうぢやう}に仰^{おほせ}らる。是^{これ}以^も左^{ひだり}典^{てん}義^ぎの太刀^{たち}と。奉^{ほう}獻^{けん}せら
るゝ所^{ところ}。吠丸^{はいまる}時鳩^{ときとむ}これ。同書^{どうしよ}文治^{ぶんぢ}元年^{げんねん}九月^{くわがつ}二十日^{にじくにち}の條^{じょう}に。參川^{さんせん}守範^{しゆはん}頼^{より}朝^{ぢやう}臣^{しん}參^ま着^{やく}。去^さ月^{げつ}二十日^{にじくにち}。西海^{さいかい}より入^い洛^{らく}す。
鎮西^{ちんせい}に於^おく。仙洞^{せんどう}の重寶^{ぢゆうほう}。御劍^{ごけん}鶴丸^{つるまる}と尋^{たづ}取^とり。今^{こん}度^{たび}進^{しん}上^{じやう}一^{いち}訖^{しやく}ぬ。これ平氏^{へいし}の黨^{たうとう}類^{るい}。壽永^{じゆえい}二年^{にねん}城^{じやう}外^{がい}の刻^{せき}。清經^{せいけい}朝^{ぢやう}臣^{しん}。御劍^{ごけん}
二腰^{ふたこし}を取^とれり。吠丸^{はいまる}鶴丸^{つるまる}これあり。今^{いま}この文^{ぶん}に由^{よし}とさし。爲^た義^ぎ吠丸^{はいまる}を。熊野^{くまの}別當^{べつたう}教^{けう}眞^{しん}に與^{あた}へ。そのうち湛^{たん}増^{ぞう}の手^てより。
義經^{ぎけい}これ得^えて。薄^{うす}縁^{えん}と改^か名^なし。遂^{つひ}に箱根^{はこね}權^{けん}現^{げん}へ進^{しん}りしたりけるを。箱根^{はこね}別當^{べつたう}行^{ぎやう}實^{じつ}。まを曾我^{そが}五郎^{ごらう}にとりしたりと
いふ。劍^{けん}の巻^{まき}の説^{せつ}も又^{また}信^{しん}じがたし。彼^{かの}吠丸^{はいまる}。義朝^{ぎぢやう}のとき。後白河院^{ごしろかのいん}の御護^{ごご}刀^{たう}に進^{しん}りし玉^{たま}ひたる。壽永^{じゆえい}二年^{にねん}の比^ひ。清
經朝臣^{せいけいぢやうしん}こをと取^とて。西海^{さいかい}へ走^はるといへども。平家^{へいけ}いく程^{ほど}もあく滅^{めつ}亡^{ぼう}せ。か。文治^{ぶんぢ}元年^{げんねん}九月^{くわがつ}の比^ひ。再^{また}白河院^{しろかのいん}の御劍^{ごけん}とい
かりたりといふ。東鑑^{とうかん}を證^{しやう}文^{ぶん}とせし。このころと批評^{ひひやう}されバ。爲^た義^ぎよしや女^{むすめ}婿^{むこ}なりといふとも。故^{ゆゑ}あくして出^し

家人^{けじん}たる。熊野^{くまの}別當^{べつたう}教^{けう}眞^{しん}へ。源家^{げんけ}の重寶^{ぢゆうほう}たる。吠丸^{はいまる}の大^{だい}刀^{たう}とバ與^{あた}ふべからず。これと教^{けう}眞^{しん}へ與^{あた}て後^{のち}悔^{くわい}し。更^{さら}一口^{ひとくち}の
新^{あら}刀^{たう}を造^{つく}らしむるが。舊^{ふる}刀^{たう}の爲^{ため}。二分^{にぶん}ばかり切^き縮^{ちぢ}らむとて。獅子^{しし}の子^こと改^かめて。友切^{ともきり}と名^なづくるといふ説^{せつ}の。
怪談^{くわだん}も過^すていよく信^{しん}トがたし。又^{また}東鑑^{とうかん}も載^のせる所^{ところ}の。鶴丸^{つるまる}の御劍^{ごけん}。保元^{ほげん}物語^{ものがたり}も見^みえて。爲^た義^ぎ判^{はん}官^{くわん}子^しども夥^{あま}
俱^くして。新院^{しんいん}の御身^{ごみ}方^{かた}まゐりしかバ。親院^{しんいん}御威^{ごゐ}のあま。近江^{おうみ}國^{くに}伊底^{いぢ}の莊^{しやう}。美濃^{みの}國^{くに}青柳^{せいりゆう}の莊^{しやう}とも。賜^{たま}りたりけ
る。鶴丸^{つるまる}の御劍^{ごけん}これあり。この鶴丸^{つるまる}。白河院^{しろかのいん}。神泉^{しんせん}苑^{えん}御幸^{ごきやう}ありて。鶴^{つる}をつかひせて見^み覽^{らん}じける。殊^{また}逸物^{いつぶつ}と聞^きえ
たる鶴^{つる}が。不圖^{ふと}水中^{すいぢゆう}より被^かさあけさる。金羅^{きんら}輪^{りん}の大^{だい}刀^{たう}なり。白河院^{しろかのいん}殊^{また}は秘藏^{ひざう}まし。て。烏羽^{うは}院^{いん}へ傳^{つた}へさせ玉^{たま}ひ。
烏羽^{うは}院^{いん}又^{また}。崇德^{すうとく}院^{いん}へまゐらし玉^{たま}ひけると。爲^た義^ぎ判^{はん}官^{くわん}へ賜^{たま}てけり。かゝれば爲^た義^ぎ入^い道^{だう}降^{かう}人^{にん}となりて。嫡^{ちやく}子^しの義朝^{ぎぢやう}と憑^{たの}
て。身^みをよせると。彼^{かの}鶴丸^{つるまる}も。義朝^{ぎぢやう}へゆづり與^{あた}られけると。由^{よし}緒^よある大^{だい}刀^{たう}されバ。後白河院^{ごしろかのいん}の。御護^{ごご}刀^{たう}召^めれた
るあるべし。東鑑^{とうかん}も。初^{はつめ}の吠丸^{はいまる}時鳩^{ときとむ}と記^しす。次の條^{くわい}の。吠丸^{はいまる}鶴丸^{つるまる}と記^しせし。不審^{ふしん}。義朝^{ぎぢやう}のとき鶴丸^{つるまる}を鳩^{とむ}時^{とき}と
改名^{かひな}せられしか。又^{また}時鳩^{ときとむ}の。源氏^{げんじ}の重寶^{ぢゆうほう}。鬚丸^{ひげまる}の一名^{いちめい}歟^や。尋^{たづ}ねべし。かくのごとく實錄^{じつろく}もよつて。その本^{ほん}を推^おとさし。
曾我^{そが}五郎^{ごらう}も伴^たれて。工藤^{くどう}祐^{ゆう}經^{けい}を撃^う得^える某^{たれ}の。源家^{げんけ}の重寶^{ぢゆうほう}。友切^{ともきり}丸^{まる}もあらず。又^{また}義經^{ぎけい}の薄^{うす}縁^{えん}と改^か名^なまゐりといふ。
吠丸^{はいまる}もあらず。只^{ただ}時宗^{ときむね}が。仇人^{かたが}祐^{ゆう}經^{けい}を撃^うん料^{りやう}。年^{とし}來^{きた}試^しして。劍^{けん}も劍^{けん}し。無銘^{むめい}の新^{あら}刀^{たう}なれど。時宗^{ときむね}の。古^{ふる}今^{いま}無^な雙^{じやう}の勇^{ゆう}士^し
よく。その夜^よ比^ひ類^{るい}あき働^{はたら}いてけき。大^{だい}刀^{たう}も名^なの高^{たか}きまゐられバ。睡^{すい}なしと思^{おも}ひ。當時^{たうじ}の小^{せう}説^{せつ}作^{さく}者^{しや}の。或^{ある}薄^{うす}縁^{えん}と
まゐるし。或^{ある}友切^{ともきり}とまゐるせしより。某^{たれ}の功^{こう}名^{めい}は。空^{くわ}しく。吼^{こゑ}丸^{まる}友切^{ともきり}に奪^{うば}れたり。されバ太刀^{たち}のとと記^しせし書^{しよ}名^{めい}に。劍^{けん}
の巻^{まき}など唱^{とな}ふるごとく。中^{なか}葉^{えふ}より。太刀^{たち}と劍^{けん}を混^{こん}雜^{ざつ}して。ひとつにおぼえたる。候^{あき}あり。和^わ名^な鈔^{しやう}に。劍^{けん}和^わ名^なを施^せさ
す。別^{べつ}に屬^{しやく}鏝^{えい}を擧^あげ。文^{もん}選^{せん}の讀^よみ。豆^{まめ}流^{りゅう}岐^ぎと注^{ちゆう}せり。今^{いま}按^あずるに。屬^{しやく}鏝^{えい}の。吳^ご王^{わう}夫^ふ差^さが。伍^ご子^し背^{せい}へ賜^{たま}たる劍^{けん}の名^なされバ。劍^{けん}



三男と
すれか
なるは
をらす

祐親が二男祐清の遠謀あるものあれば頼朝の命運こゝろ竭せば。母が父いかに謀り玉ふ共。終に脱れ去りて。他の助と求玉ふなるべし。この人の骨相を觀るに。人の下風に立べうもおぼえせ。このとき此の恩を施さば。その志と得たらんときに。父が餘命を繋ぐよすがとなりけん。且その外孫の殺すとも。平家の免許と受すして。頼朝さへに害せん。謀のよろしきにあらす。父が謀略合期せず。妹が密通の悪名と。世に普くまらるべし。この事後に。京師へ聞ゆるとも。既に出生の赤子を失ひたれば。平家の祟あるべからず。と彼を思ひ。これを思ひて。さて事の趣を。頼朝卿へ告たるなるべし。まかるゝ世俗のいたく平家を憎むのあまり。事の理義を考えずして。只管伊東入道を。悪人とのみ思ふたがえり。彼祐親入道。元來平家思願の武士あり。まかるゝその女兒が。親の聽と受せりて。鬨隙と鑽り牆を踰。頼朝卿と密通して。既ゝ男兒を産する。女兒が不義の縁と連き。平家の仇となるべき人の子を。密やかに養育す。實は祐親入道。義もなく恩をまらぬものなり。彼北條時政が。頼朝卿の翼と獲んとおぼせ故。女兒政子へよび玉ふをまらせ。山木判官へ婚縁を締りし。既ゝその密夫あるをまるといへとも。山木が勢ひは憚りて。強て政子を嫁らして。山木が宿所へ送り遣せし。祐親法師が忠義の爲。外孫と失ひし。日と同じて談るべからせ。かゝるゝバ祐親入道。さのみ憎むべきものまらせ。頼朝卿の。大器量の。大將なれば。よくこの理義を辨へて。とじめぬ九郎祐清を召出して。賞と行んとする。受ざりしかば。忽ち舊怨を去て。祐親法師が死刑と免し對面去玉んと仰せし。かくて祐成時宗の。祖父も伯母も。平家の方人なるまよつて。世の中も狭くありて。曾我太郎祐信を養ふ。浮浪人にてありながら。五郎の幼稚さより。勇氣殊さらし。逞しければ。母公の終は禍を。惹出さんか。と咄みて。祝髪して亡父の。菩提と吊へと。教訓し。箱根權現の別當。行實の弟子として。やがて登山さした

れども。時宗いよく復讐の志移らせ。遂に箱根を下山せしかば。いたく母公を責懲さきて。彼此と於辨あるくほど。北條時政の。五郎が勇敢偉ぶるを見て。意中謀るよゝあざむく。とりく手なづけて。他事なく款待し。みづから烏帽子親と稱して。こき元服さし。時政の一字を與て。曾我五郎時宗と名告らし。此時宗の宗の字よまされ。の説あり。時政より六世の執權。相摸守時宗朝臣の乳名と。北條五郎と稱せり。曾我五郎時宗のむねの。致といふ字と書べし。これを時宗と書ひ。北條五郎ととりちがへたる。と思ふ人もあれど。東鑑に。曾我五郎時宗とあれば。悞といひがたし。譬は西行法師の俗名を。佐藤兵衛義清といひしかば。やがて則清とも。憲清とも。書たるが如く。まのころの記録に。人の名告も。訓のかよはずと。いくばくも引つけて書例あれば。曾我五郎の名告も。或は時宗と書。あるひは時致と書たるあるべし。もし推量の説を加るときに。北條時宗執權の世に。諱て致の字に代たるにや。とおぼし。さて北條時政が。かくのごとく曾我五郎をとりとやして。竊に仇撃の後見したりける。眞實にその孝心を。感激せしにあらす。底意より。まの胞兄弟を欺き賺して。鎌倉殿とはかり奉らん爲。その故いかにとされば。このとき平家既に亡びて。四海の賞罰。みな鎌倉の決断にあり。頼朝もし世を早く去玉んに。頼朝のなほ幼稚し。まからば海内の權柄の。かづから時政が一家に歸して。よろづ思ふまゝなるべし。と深く謀りて。彼兄弟に。をりくひかひ火を焼つけ。密に説客をもて。鎌倉殿に。其許の祖父。祐親入道の仇なり。祐經とのみ撃とき。父のため孝なりとも。祖父の靈を慰がたし。よく心符いへ。と密語せしあるべし。祐成時宗は弱官たり。且祖父祐親が自殺せし縁の趣をまらす。その勇あまわりあれど。その智の足らざる故に。うまく北條に欺詐られて。又一層の恨とまし。遂に時政が爲に。刺客となること曉らす。仇人祐經と撃得たる夜。又鎌倉殿を犯し奉らんとし。またるな



り。嗚呼懐かな。この胞兄弟が勇を好むと。その志に過たり。頼朝卿の理義によつて。奮怒と思ひ玉はず。遂にの親を赦免し玉ふといへども。祐親も又恥を去る老入道なれば。忽地に自害をたるならずや。去かれ祐親が枉死の。自業自得なり。祐成時宗このとき。なほ幼弱にして。事の頼末と去らず。老奸の舌頭に説惑されて。事あゝも至きり。亦措ひべし。去かる鎌倉殿の。高連の大將までをいせしかば。祐成時宗勢ひ究りて。兄の仁田四郎忠常を撃き。弟の小舎人童五郎丸を抑留られて。北條が奸計いたづらなりしかば。時政その機密の漏んことをとれそきて。亦密に祐經か子。大房丸をひかひ火と焼つけ。頼朝卿のいかよもして。助げやとおぼせし時宗と。大房丸を申し乞せしかば。終は五郎の鼻首せられしなり。何ともてこれと去るとされば。工藤祐経の。殊に鎌倉殿のおぼえめでさく。勢ある縮紳。箱根山まで箱王が氣色を見て。赤木作りの短刀をとらせし。その復讐の志あるを去さば。既よその復讐の志あるを去るとき。常任坐臥。こを禦ぐの用心せでやある。ざるを彼胞兄弟の。浮浪人として。頼朝將倉へ潜び入り。思ふまゝ本意を遂ぐる。裡に北條の翼あれば。時政のかくのごとく。祐成時宗を欺詐りて。刺客と去つれども。その行を。義時このときに至りて。曾我兄弟と賺せしごとく。禪師公曉を。のかして。實朝公を撃せし。こゝに至りて北條父子の奸計。やうやくも成就して。頼朝卿の統と絶。九代の執權時めさぬ。公曉も又。父頼家公の撃き玉ひし比の。幼小にして。この頼末を詳みせ。義時が人をもて。右大臣こそおん父の仇なれ。みづからこを撃玉ひし。鎌倉の武將たらんもの。禪師の外もあゝさんといひせしを。公曉の實言と思ひあして。父の仇もあらぬ。叔父の大臣と害せしのみならず。その身も忽ち北條が爲に殺されり。北條父子が奸智も長る。曹操直義の上へ出べし。當時人とば欺くとも。いかでか天と欺き得ん。後世に論定りて。人又その惡といふもの多かり。

各位の何とか思ひ玉ふ。曾家物語といふ冊子も。往昔の小説あれば。おまことをまゝ一え記せしも少からず。鬼玉の童の名あり。曾我時宗の童名を。箱王と唱え。又箱根の行童。壽王。東鑑文治五年二あり。又俊寛僧都の童扈從。有王。龜王。又爲義の季子に天王あり。源義經の乳名。遮那王等。毛舉も違わらず。これらを見て。鬼王も又。童の名あるよゝを去るべし。東鑑。建久四年五月廿八日の條に。曾我五郎と。大見小平次に預らるゝよしあり。近江小平太といふものへ見えと。新左工門。團三郎の。後人の偽作。就中時宗朝夷が草摺引といふもの。絶てあし。これの建保元年。夏五月の和田合戦に。朝夷二郎義秀が。足利義氏の鎧の草摺を。引とめて組んしたりければ。義氏その勇力に。敵しがたしと思ひて。馬を拍いれ奔らせしかば。草摺の弗と離れて。朝夷が手も残り。主の遙に脱れ去ると。東鑑。その餘の軍記に記せしと撮合して。やがて義氏を。曾我五郎に作りかえたる。彼朝夷の。和田義盛が三男にて。木曾義仲が妻。朝繪が産ところなり。元暦元年春正月。木曾義仲の。近江の粟津にて討死し玉ひし頃。朝繪の和田義盛に生拘らる。義盛朝繪が勇力に愛て。鎌倉殿へまうし乞て。これを娶り。朝夷を産したれば。建久四年。曾我五郎が父の讐経を撃たるとき。朝夷僅に九歳なるべし。或は七歳なりともいへり。去からば義秀。多力の人といふ共。このとき時宗と力競せば。蟬の車も向が如けん。彼義秀を。朝夷と唱るよしあり。安房に朝夷郡あり。もしこゝらも所領ありしにやたづぬべし。人すらかくてあるもの。友切丸ならずして。友切丸といはるゝも。憤るゝ足らずとせん歎。さし思ひすや。と小膝を鼓き。席を拍ていきまけり。衆皆呼とぞ感じける。

第三 曾我十郎衛の袖

忘れて年と經しものを。友切丸の言譯と。聞くにむかしそなつかしき。抑是の。曾我十郎祐成に。二世と契りし大磯

の。虎が夫の像見とて。持佛堂の柱に掛。朝な夕あも怠らず。回向去たりし今様小袖。八丈絹の縹緗。紋の莽に帽額の外に模様なかりしに。信とした證據あらざりせば。観るもの疑ふともやとて。ある人千鳥を縫せしより。十郎ぬしの衣裳といへば。かならずこれに千鳥をつけ。五郎どの、衣裳といへば。蝶をつくる事となりつ。かくのすれども何のゆゑに。蝶と衛をつくることゝまらず。これこそ當初曾我兄弟が。被たればと思ふの違えり。蛇に足を添るといふかるとをやいひ侍らん。漢土のさらへ日本でも。假名冊子作るものに。但見といふとあり。警。貴賤老弱の形容に。そのほどくを思ひよしく。衣裳の風流。桂下襲の色までも。見るが如くに書まるすに。又据なきにしも侍らす。時宗どのが童にて。箱根山にとはせしときの。鹿に秋楓の染衣の。この夕ぐれと待てよといふ。歌の心に合したる。小説作者の風流ぞかし。まかるに耳と信するもの。件の衣と箱王どのが。實は被たらんと思ふより。口が手づからに筆を取る。その日くの日記だにも。記し漏すが多かるに。五十年も百年も。昔の人の一代の物語をみ作らんに。衣裳に染たる模様まで。漏さず傳ふるよしあらんや。祐成ねしの大磯かよひに。千鳥の小袖と思ひよせし。い。「おもひかね。妹がりゆけば。冬の夜の。川風さむを。千鳥鳴くなり。といふ古歌のこゝろと取たる。まかも地方の大磯の。里としいへば浪の音。松ふく風も冬の夜に。妹がりそゆく風流士の。餘情を筆にまかせしのみ。眞に曾我十郎ぬしが。衝つけたる衣裳して。大磯かよひきたるよりあらず。まかるに後の生好事が。實は衛の模様せし。衣と被たらんと思ひとりて。裙と衛と縫せしゆゑに。眞の好事家の却疑ひ。衣と模様の年代似げなり。むかしの摺箔のみありしが。後又縫の出来る程に。縫と箔と二様なれども。亦そのうち縫師が兼て。箔をさへ摺入れりか。箔箔屋とい唱るなり。建久時代にこの縫ある。いと不審と肩うち擧めて。ふかく疑心を起すから。眞實ぬしの像見の衣の。取物

よなる朽をし。さこそこの推量り玉へ。又この絹を。八丈絹と唱れば。伊豆の澳よりありといふ。八丈絹より織出す。絹なりと思ひとり。八丈絹もいと古し。と誇貌にいふものあり。この今の眼もく。いにしへを見る迷ひに侍り。むかし八丈絹と唱し。八丈の鳴絹より侍らす。これ尾張國より織出せしものにて。長サ八丈ある故。八丈絹と唱たり。されば治承五年五月の頃。十郎藏人行家が。三河國に屯して。伊勢二所の大神宮へ。送り奉る御幣物に。美紙十帖。八丈絹二匹とあり。東鑑。美紙。今の美濃紙よく。八丈絹。尾張の名物。三河は鄰の國産なり。又時宗どの、衣裳にも。蝶とつけしは當初の。小説作者が滑稽なり。河津も曾我も藤原なる。平氏の家の紋とする。蝶とすくべき。よりのあらねど。時宗どの、時政ぬしの。烏帽子見より玉ひつ。彼北條の家の紋。三鱗も侍るなれど。姓の平朝臣なり。この露ばかりの所縁をとりて。さてこそ蝶をつけたるを。その鱗をばとらずして。蝶をつくるよ又所以あり。北條ぬしの烏帽子見。曾我と名告る時宗どの。鱗をつけさ。いと似げなし。平氏たる北條の。蝶の元來由ある紋。蝶は衛の對もよし。昔の作者のさるものなれど。後の人のふかくも思ひ。又朝夷が鶴の紋。小林と稱するよ。昔初て朝夷。扮たる俳優が。紋なり別號なるよ。をさく人もあるめれど。この蝶鳥の模様の。み。いふものなきが。朽を。思ひあまりて。去れたる事を。まらざる人の爲まなん。いと舌長し。と笑ひ玉ふ。これのみなら。大磯の。虎よならべて化粧坂の。少將といふ遊行女の。曾我五郎と思ひ。れもの。一夜妻よ。いと稀なる。節操ありなるといひ傳る。一切ある得がたく侍り。彼少將と聞えし遊君を。梶原源太などよこそ。あふたる事あるべけれど。年來吾儕が主と頼し。大磯の虎よひとしく。時宗どのをいと。思ひし事絶てなり。東鑑よく見玉へ。手越の少將といふ遊女の。あれど。化粧坂が事。載せ。彼手越の少將を。むかしの作者がつ



天
 後
 の
 席
 成
 け
 付
 死
 び
 路
 二
 本
 一
 寺
 と
 跡
 在
 る
 知



天
 後
 の
 席
 成
 け
 付
 死
 び
 路
 二
 本
 一
 寺
 と
 跡
 在
 る
 知

吉
 言
 登
 屋
 風

十三
 春
 竹
 留
 別

くりかえて。化粧坂とよまるせなるべし。されば手越の少將の。曾我兄弟か仇撃の夜。黄瀬川の龜鶴もろとも。工藤祐経が井手の狩屋侍りて。吉備津宮の大藤内等も。酌とり。枕をせよめ。前後をらせよ臥たりしが。彼兄弟が。讎敵祐経と撃得たり。と呼ぶ聲は驚き覺て。夜討入りぬ。と叫びつゝ。まの人の人告たるものあり。また祐成ぬしが。虎は相馴しといふよりの。慥なる証文侍りて。虚言はあらねども。好色ものと思ふの違えり。兄の九ツ弟の僅も。七歳と聞えり。父の仇人と撃んとて。雀小弓は木刀もて。假初の童遊びも。この事をのみ思ひ忘れず。稚さときどみかくの如し。況て人となりて色を好み。漫遊里は遊びたはふれ。揚代はさつまりて。家傳の鎧逆澤瀉を質し置。虚氣もの、祐成ならせ。いかでか大敵を撃も得ん。世といふ曾我の逆澤瀉の。さのみむづかき鎧の。あらせ。胸二段白糸もて。外の萌黄糸も威すを。逆澤瀉の花に象り。萌黄のすきはち葉の色。又何にまれ。搖の糸を萌黄もして。毛を水色も威せしを。おもだかかどしと唱たり。又古老の説も。菱威といふ。候よく。逆澤瀉の事とす。菱を割く綴たるを。逆澤瀉といふぞかし。かゝれば又世間も。逆澤瀉のめづらからねど。その來歴のまり侍らず。俳優などいふもの。夢だも比へたる。理外幻境なれば。祐成が花街がよひ迎。情慾の淺ましきとさへ。作るとならば作りぬべし。これらのうへをいふと。一聞玉ひそ。昔の遊女の何事も。今の遊女も品かたりと。強は情といつたり。淫と賣るのみならず。やんどとなさうへにも召れて。側室となるも最多かり。警バ。平相國は倦れたりし。祇王佛。又義經判官の。妾。靜。平。重衡を慰めまゐらしたる千壽など。悉あけつるの。んいうるさし。みな是いにしへの遊女も。白拍子などいふものなれど。その節操の堅固なること。今の遊君の儔もあらず。まかるよよく考ざるもの。曾我十郎がまのびくは。虎がもとへ通ひし。と彼物語は記せし。いと

ほつかなき事なり。仇人は心放さず。謀なんといふ。その好色を助るもの。辭言。といひ罵る。その東鑑の條々を。よくも見ざる惑ひなり。東鑑建久四年。六月朔日の條。曾我十郎祐成が妾。大磯の遊女。虎とこれと召出さるゝといへども。口狀の如し。者バその答なきの間。放遣され畢ぬ。といへり。に祐成が妾。大磯の遊女。虎と號すと記せしを見て。今の遊君といふもの。異にとまり玉へ。此頃遊女と唱るもの。多くは白拍子の類も。酒宴遊興の席も侍りて。今様朗詠など詠ひしあり。夥の人の遊びとなる。虎にわれと身をバ只。祐成ひとりうち任せて。借老の契り淺からずと。聞えたるものなれば。祐成が妾虎といへり。義經の妾。靜と記せしもこれに同じ。又同書。同年。同月十八日の條に。故曾我十郎が妾。いへども黒衣袈裟を着。箱根山の別當行實坊も。おいて。佛事を修し。和字の風誦文を捧。葦毛の馬一疋を牽て。唱導の施物とす。件の馬。祐成が最期也。虎も與るところ也。則今日出家を遂。信濃國善光寺へ赴く。時。歳十九と記せり。又曾我物語第十二卷も。虎の祐成討死の後。尼となりて。所の翁を羨内も。井手の屋形。祐成の。最期の迹。かとはばかり。いと涙もまづみつゝ。摘「露とのみ。消にし跡を。来て見れば。尾花が袖に。秋風ぞふく。いかに哀れにも悲しかりけん。今更も。この歌と吟すれば。坐も涙。さふり落て禁めがたし。かやうに實録もあふ事も。又妙からねば。草紙物語なればとて。誣がたき事又多かり。むかしの作り物語の。今の作り物語とまじからず。虚實の只見るもの。取と捨にあらんかし。さるを物頭も。思ひ誇たる人の。動すればむかしの遊女を。今の遊君も引くらべて。仇を討んとて。冤ふ壯士が。色を好て花街も通ひ。志も移なん。おひる心もまよて。彼祐経の得も撃れし。と只目前の理を推し。その才の短。人おのく。木石もあらず。仇人の所在をまれば。索ねめぐる程なら。色をバ絶て見かへるべからず。これの仇人の。威勢ある縉紳にて。まか

も眼前あり。これが心と放させんぬ。友だちの誘引ふまゝ。遊女白拍子とも嫌ふべからず。まかるゝ虎の女流なれども。人と云ふの才われべ。いつとなく席もかさなる隨に。祐成を思ひ思ひぬるゝといへども。祐成のこれが爲志を移さず。仇討よとして出る日まで。身の大事を告されば。今かうと思ひしとき。後の恨も痛しければ。途より戀て從者を歸して。虎へ像見とわくりし。又一説に。大磯の虎の。相摸國諸越の里よく生れり。よりて乳名と於兔と唱え。後虎と改名をといへり。縁故と解とさし。於兔の異朝。楚國の方云て。虎の事。又諸越の里。諸越の原。共相摸の各所よて。和歌よこの諸越を。唐山よかけて詠るも多あり。されば人醫家集。あづま路の。もろこしの里よ。とりてたつ。きぬをよからの。ころもといふらん。かくのごとく見えられたれど。れをらくの好事のもの。虎といふ名は附會して。乳名と於兔として。諸越の里の事まで。とりよしていふよやあらん。體なる物と記せしを見侍らる。さて彼曾我兄弟の。南家の祖。左大臣藤原朝臣。武智磨の四男。參議從三位乙磨卿の後胤侍り。乙磨より十一代の孫。伊豆國押領使維繼。その子狩野九郎維次。その子股野四郎大夫家次。その子從五位下。太郎大夫祐家。實久津見入道寂蓮の子なり。祐家の子。河津二郎祐近も子も三人あり。河津六郎祐道。祐真。伊東九郎祐忠。と大系圖よ見え侍れど。東鑑よ由とさし。伊豆二郎祐親。その子河津二郎祐泰。伊東九郎祐清なり。祐親入道。河津巢作の莊と。祐泰も譲り與て。その身の伊東の莊も居り。さればはじめ河津と稱し。後伊東二郎といふもや。又大系圖よ。祐真といふものと載したる。祐信と誤りて。信を眞と作れるよや不審。かれば祐成時宗の。乙磨卿より。十世相續の未業。又工藤祐經も。同じ家より出たる。乙麻呂より八代の孫。遠江權守爲憲と。はじめ木工介も補せられしかば。空の工と。藤原の藤を合して。子孫工藤と號す。爲憲の子從五位下時理。その子維景。一維兼その子維

職。その子維次。以上前よその子股野四郎大夫家次。その子武者所祐次。その子工藤左衛門尉祐經。その子左衛門尉兼大和守祐時。乳名と大房丸といへり。祐時の弟。六郎左衛門尉祐長等。一説に。維兼の兄。駿河守時信と云し人。伊豆國伊東も住す。よりて伊東と号せし。これ伊藤工藤の祖。といへど。大系圖よ由とさし。時信の二階堂の祖。かくの祐成時宗の。乙麻呂卿より十七世。相續の未業もそありける。又按する。伊東。宇佐美。河津の莊の。伊豆國那賀郡あり。北條と蛭小島。田方郡も屬す。蛭小島より。狩野川を渡れば。三嶋へ出づ。この邊も。狩野介茂光の居たるなり。又曾我の莊の。相摸國足柄郡あり。鴨立澤へ遠からず。今大磯のはとりと。鴨立澤と唱ふけれど。彼西行上人の。秋の夕ぐれ。と詠たる。この處もあらすかし。又中村の餘綾郡ありて。小磯と酒匂の間なれば。曾我へ遠し。昔の曾我中村と。うちならべて唱たれば。今の中村の。ひかりの中村もあらざる歟。これらの思ひ忘れ侍り。建久四年六月七日。將軍家。朝駿河國より。鎌倉へ還。向せ玉ふに。曾我太郎祐信。御共候する處。路次にて暇と玉り。剩曾我の莊の。乃具を免除し。祐成時宗が夢后を。吊べきよし仰下さる。これの彼等が勇敢の。息あきを感ぜしめ玉ふよつてなり。と東鑑も載たると見るに。人の世も在る。七十稀。よしや若くて世を去とも。この胞兄弟の如くならば。羨むべき事ならずや。時宗ぬしを。神よまつりて。勝名明神と號するが。神社の相摸國あり。又東海道なる。吉原と蒲原の間。厚原といふ所にも。彼兄弟を神よまつりて。八幡と號する。又厚原もならびく久澤といふ所も。泉福寺といふ蘭者侍り。こゝも祐成時宗の墓あり。十郎ぬしの法名。高崇院良雪大禪定門。五郎ぬしの戒名。鷹名院土山良富大居士と記したり。この法名いと後まつけたるものなるべし。かくの千鳥の模様。の事を。説わかさんと思ひしより。問きあたりの長々。傍いたくもればすらめ。もし候もあらんぬ。心くま

くまかへんと。と教玉へ。とまめやか。身のほどありすいよしへの。相摸詔りの鄙びても。塵さへすえぬ古小袖。氷際ぞたつ辨舌よ。衆皆耳を側たり。

第四 諸葛孔明が陣太鼓

浩所よ。道具棚の下段より。滾々と輦び出るものありけり。その形彼源順の。まろかねて。井のこかめのかたをつくりて。といへる。火桶ももわらせ。又。温公の石を飛して。救世の才を顯したる。氷瓶ももわらせ。方よ。羊誘の。手すさみ。獸を飭り。賣炭翁の命をはかりし。炭取といふもの。似たれど。眞黒よし。目鼻分明ならせ。口の廣くして。紙を打れ。耳の廣くして。銃に等し。衆皆いまだその名をまらね。只うちまもりて。居たりけるに。このも席上に。嘯と推坐りて。西國詔りの語聲と。かしく。見れり。この質庫へ。新參のものよ。異國の名器され。名告らす。まゑるよ。あからん。これ。唐山三國のとき。後漢の諸葛忠武侯孔明は。秘藏せられて。南蠻までも名を轟せし。陣太鼓は。はひへども。漢家ふたゝび興ざる。天命限りわれ。是非及ばず。惜か。孔明の。五丈原の露と消玉ふ程よ。僅よ。十あまり。六とせを。魏の大將。鍾會。董艾等。攻惱され。姜維が。武略も防ぐによし。誰周が。學才も用るよ。所なく。後帝阿容々々と。魏に降参し玉へ。帝第五のおん子。北地王劉誕。孔明が。子諸葛瞻等。を。と。じ。め。と。して。義により。恥を。ま。る。もの。或。自。殺。或。陣。没。し。又。命。を。惜。む。小。人。の。國。賊。た。る。魏。の。奴。と。あ。り。と。い。と。見。ぐ。る。き。分。野。あ。れ。ど。見。れ。り。大。鼓。の。身。し。あ。れ。り。撥。こ。そ。あ。れ。り。罰。の。當。得。ず。空。ま。く。他。の。實。と。な。り。て。晋。よ。と。い。ま。り。唐。宋。の。世。は。傳。え。ら。れ。り。か。蒙。胡。胡。元。の。時。よ。至。り。て。夷。狄。の。實。と。な。ら。ん。と。羞。彼。處。の。使。杜。世。忠。が。船。よ。竊。に。た。り。て。博。多。の。津。よ。來。り。と。い。ま。り。そ。れ。よ。り。彼。處。と。浮。浪。ふ。程。よ。裏。皮。破。れ。て。な。か。り。か。バ。あ。る。入。見。れ。を。伴。ふ。て。冬。籠。の。

孔明が陣太鼓の事
南遊記の西遊記

楊氏が正統辨
録卷の四見

調實と。子よ。讓。孫。傳。へ。て。又。百。年。よ。お。よ。ぶ。程。よ。こ。の。國。人。の。物。い。ひ。ま。を。い。つ。と。さ。く。覺。た。り。せ。め。て。も。の。思。ひ。で。よ。王。城。の。地。と。踏。ん。と。く。ま。づ。平。安。京。と。歴。覽。し。や。が。て。吉。野。の。皇。居。と。拜。見。て。且。く。大。和。に。旅。寢。す。れ。ど。も。我。傳。來。を。知。も。の。な。け。れ。り。只。古。物。と。の。み。稱。せ。ら。れ。り。里。見。主。祝。介。が。若。黨。某。甲。が。内。侍。の。女。の。童。と。誘。引。出。せ。り。頃。人。肉。經。記。よ。畧。賣。さ。れ。て。共。よ。こ。の。身。を。沈。め。ら。る。里。見。が。家。隸。の。情。慾。の。事。周。公。且。よ。も。劣。ら。ざ。る。忠。義。無。双。の。賢。相。と。稱。せ。ら。る。諸。葛。武。侯。の。遺。物。な。れ。ど。も。世。よ。伯。樂。あ。ら。ざ。れ。り。馬。骨。よ。等。し。馬。の。皮。張。か。え。て。鳴。ら。す。も。の。な。り。され。り。中。葉。開。居。の。伽。に。伴。れ。り。日。の。世。も。安。く。冬。の。爐。邊。よ。夷。坐。で。雪。の。ゆ。ふ。べ。も。寒。か。ら。ざ。り。し。も。勅。古。器。と。目。利。さ。れ。て。も。世。の。重。寶。と。い。な。り。も。せ。ず。か。く。質。庫。の。窮。屈。さ。莊。子。が。所。謂。散。木。を。羨。め。ど。も。そ。の。か。ひ。な。し。す。べ。て。鉦。鼓。の。原。軍。器。さ。れ。共。北。狄。の。樂。よ。も。つ。ば。ら。これ。と。用。る。は。ど。も。後。中。國。よ。う。つ。り。來。く。今。の。あ。べ。て。の。樂。器。と。あ。り。ぬ。か。れ。り。鉦。鼓。の。殺。伐。の。聲。あ。り。これ。と。樂。器。と。ま。た。り。より。と。か。く。世。の。中。靜。か。ら。ず。と。漢。の。博。士。の。咄。き。ぬ。され。り。こ。も。上。右。の。僧。家。よ。鉦。鼓。を。鳴。す。と。禁。め。ら。れ。た。る。例。も。あ。れ。ど。今。に。至。り。て。是。非。と。論。ず。べ。う。も。あ。ら。ず。某。ひ。か。り。諸。葛。武。侯。よ。從。ひ。て。事。の。こ。ゝ。る。も。些。ば。かり。の。辨。たり。各。位。の。い。か。も。お。も。ひ。玉。ふ。彼。劉。玄。德。の。漢。景。帝。の。立。孫。よ。て。中。山。靖。王。の。後。裔。り。後。漢。の。獻。帝。既。よ。曹。丕。よ。殺。さ。れ。玉。ひ。か。バ。漢。の。祚。の。絶。ん。と。を。悲。み。衆。よ。推。尊。れ。て。已。と。得。て。天。子。の。位。よ。即。玉。ひ。在。位。僅。よ。三。年。よ。て。白。帝。城。よ。て。崩。き。玉。ひ。か。バ。諡。して。昭。烈。皇。帝。と。奉。る。大。子。劉。禪。少。して。位。を。嗣。王。ひ。か。バ。み。ま。る。賢。か。ら。を。い。せ。り。か。バ。佞。臣。黃。皓。等。と。寵。愛。して。遂。よ。亡。び。玉。ひ。な。り。ま。か。れ。ど。漢。の。正。統。よ。て。を。い。そ。る。な。れ。り。後。帝。と。も。又。帝。禪。と。も。稱。と。べき。を。後。の。學。者。の。只。舊。文。よ。あ。ら。ひ。て。改。め。せ。昭。烈。と。先。主。と。し。帝。禪。を。後。主。と。と。あ。へ。ふ。る。よ。唯。綱。目。の。一。書。よ。至。り。て。よ。く。こ。の。理。を。辨。て。漢。の。獻。帝。の。末。よ。附。て。後。漢。昭。烈。皇。帝。章。武。一。年。と。ま。る。し。よ。と。と。あ。は。帝。

今いまの獅子しし舞まひ漢かんの諸葛孔しよかくわん
 明あきらくうえいさるとのふ孔明南雲けいめいなんうん
 孟獲もうわくと攻せりじとに獅子ししと化けり腹はらの中
 へ入いれて進退自在しんたいじざいに板いた重おも猫ねこと
 ろが駈か立ててこの陣せんへ追おひらひ猛もう
 獸けつとさど強つよく退ひけることいふ。
 こふ図ずをるとこ強つよく大神樂獅子おんがくしし
 舞まひの俳優えびあり
 昔むかし物語ものごとふ云いむに寛永かんえい大神宮御教大おんじんぐうごうけだ
 神かみとて普ふ言ごん中ちゆうと俳優えびをうたさる
 鼻はな高たかに假面かめんとさぶたもの直ちか舞まひと被か
 て白袴しろはかまと穿き御幣みひと持もて先まへさかりの次つぎ



か四五歳四五さいむりがる男おとこ童わらわ瑛えい瑠ると裁きた
 長なが絹きぬと被かて白袴しろはかまと穿き中ちゆう啓けいの扇あふぎと鈴すずと
 左ひだり右みぎもちてあゆむ三さん番ばん小こ麻あさ下したさる
 男おとこ箱はこと持もて四よ番ばん布ふ衣いの袋ふくろ束たばさる男おとこ
 其次つぎ四よ足あし踏ふむ大おほ長なが柄え蓋かぶた取とりあはのけ
 ておはると上うへへ獅子ししの頭かぶと居い中ちゆう大おほ鼓つづみとさじ
 一ひと方かた度たぎの御ご紋もんと中ちゆうへ並ならび御ご幣ひとさじ
 四よ吹ふ入いれて昇のぼるの首くび為な帽子ぼうしと被かて白張しろは
 袴はかまと穿き左ひだり右みぎつらふ笛ふえ小こ鼓つづみ打うち太おほ鼓つづみ
 打うち打うち合あはるとに瑛えい瑠るいふにさる
 男おとこ童わらわ神かみ樂がくと舞まひふ拍は子こ次つぎあり
 急いそむ。あつとて感かんふ堪たむ。



禪を後主と書されば。後の諱を脱れざりき。このうち元に至りて。ひとり會稽の楊維禎が。正統の辨を昭烈と尊むこと。理義分明あり。よりて明の學士等。昭烈。帝禪を天子の正統と定めたるを。羅貫本が三國志漢義より。改めし。劉の先主。後主との稱より。夫主との君。次の稱なり。周禮は。主との公。卿大夫をいふといへり。又禮記禮運は。公は仕るを臣といひ。家は仕るを僕といふと。なん。か。れ。ば。臣。と。の。君。と。對。する。の。稱。よ。し。て。僕。と。の。主。と。對。する。の。稱。ん。これよりて日本より。中葉より主従の稱あり。此より主従と。主人僕従の略されば。天子は。か。い。て。主。従。と。稱。せ。べき。の。謂。あり。か。れ。ば。立。徳。の。成。都。は。天。子。の。位。に。即。玉。び。て。これ。を。昭。烈。と。諡。し。惠。陵。の。み。さ。ぎ。に。葬。り。奉。れ。ば。初。貶。細。と。な。し。帝。禪。の。魏。は。降。り。て。安。樂。公。に。封。せ。られ。地。を。失。ふ。の。君。の。成。敗。は。就。と。さ。し。帝。と。稱。する。の。義。か。し。と。思。ふ。もの。も。あ。る。べ。な。れ。ど。魏。の。漢。の。賊。なり。後。世。い。か。で。彼。が。封。爵。と。唱。て。帝。禪。を。安。樂。公。と。せ。べき。亦。彼。曹。丕。の。獻。帝。を。推。か。ろ。し。て。山。陽。公。に。封。せ。し。は。同。じ。只。その。諡。を。さ。さ。の。故。は。帝。禪。と。稱。する。の。よ。し。これ。と。後。主。と。い。ふ。の。義。も。か。は。これ。よ。ま。た。が。へ。り。か。く。の。陳。壽。の。三。國。志。に。鍾。會。の。蜀。將。を。會。する。條。に。昭。烈。帝。を。貶。し。て。益。州。の。先。主。と。さ。る。せ。し。を。見。よ。こ。は。先。主。の。名。に。と。じ。ま。り。よ。き。晋。の。魏。を。篡。ひ。吳。を。亡。し。て。三。國。を。并。した。も。て。り。天。下。の。日。なく。地。は。兩。の。皇。な。け。れ。ば。晋。よ。か。い。て。何。と。も。い。ひ。め。今。千。載。の。後。よ。ま。て。な。は。この。稱。よ。沿。ふ。い。か。よ。ぞ。や。又。漢。を。改。め。て。蜀。と。せ。し。事。も。陳。壽。の。筆。は。出。たり。黃。氏。の。日。抄。と。い。ふ。もの。蜀。の。地。の。名。よ。り。て。國。の。名。よ。り。あ。ら。せ。昭。烈。帝。の。漢。と。こ。そ。稱。し。玉。ひ。よ。け。れ。蜀。と。稱。し。玉。ひ。し。事。な。し。吳。の。孫。權。と。お。な。じ。く。魏。賊。を。討。んと。盟。ひ。玉。ひ。し。と。き。も。漢。と。こ。そ。稱。し。玉。ひ。よ。け。れ。これ。を。蜀。と。云。もの。魏。人の。所。爲。に。彼。昭。烈。皇。帝。の。漢。を。嗣。玉。ふ。を。憎。む。の。故。も。と。や。く。劉。

氏漢の正統を絶まくおもひ。漢といふことを思て。蜀との名づけたり。まかるは後の文人墨客の。陳壽の當時は阿柱たるを曉らせ。杜子美の詩といへども。おは蜀主と稱したり。かくての義は。理と知るの學者といふべからせ。明も至りてやうやくよ。この理を曉るといへども。なほ蜀漢と唱るものあり。もし前漢後漢は紛れんと。厭ひ。漢末とも。季漢とも稱すべきよ。これを蜀漢と稱するといふ。よく謂を。これ五十歩をよ。て。百歩を笑ふの感ひなり。今の君子の。曹氏。魏。司馬氏。晋の臣。よ。あ。ら。せ。況。て。日。本。人。の。與。ら。せ。ま。か。る。を。お。は。魏。と。晋。と。阿。諛。て。漢。を。貶。し。て。蜀。と。名。づけ。先。主。後。主。と。稱。する。の。抑。誰。の。爲。ぞ。や。理。義。の。爲。よ。書。を。讀。む。もの。の。こ。ろ。得。べき。と。か。い。され。ば。彼。綱。目。の。帝。禪。と。後。主。と。さ。る。せ。し。を。姚。燧。と。い。ふ。博。士。の。い。た。く。非。り。たり。き。又。諸。葛。孔。明。の。書。翰。も。先。主。と。稱。する。あり。原本。の。先。帝。と。あり。し。を。晋。よ。傳。ふ。る。と。き。先。主。と。改。め。た。る。に。杜。微。が。傳。ふ。孔。明。の。書。を。載。て。帝。禪。の。と。こ。ま。う。そ。く。だ。り。よ。朝廷の主。公。今。年。初。十。八。と。あり。朝廷と稱ながら。主。公。と。い。ふ。ん。道。理。あり。後。人。の。加。筆。せ。し。事。疑。ふ。べ。から。せ。炎。武。が。説。は。愚。接。を。さ。て。三。國。志。を。爲。り。たり。し。陳。壽。の。字。を。承。祚。と。い。ひ。て。巴。西。安。漢。と。い。ふ。と。ころ。の。人。なり。少。かり。し。と。き。誰。難。識。し。たり。周。を。師。と。し。て。漢。蜀。なり。よ。仕。へ。觀。閣。令。史。と。云。職。を。授。ら。る。父。の。喪。は。疾。あり。て。婢。よ。藥。を。九。せ。さ。し。たり。けれ。ば。御。黨。の。讒。と。う。け。これ。よ。坐。せ。ら。れ。て。累。年。零。落。した。れ。ども。晋。の。張。華。の。才。を。愛。して。孝。廉。を。舉。し。より。佐。著。作。郎。よ。かり。に。れ。れ。ば。や。が。て。三。國。志。を。撰。み。き。ま。か。る。よ。と。じ。め。陳。壽。が。父。の。漢。の。世。よ。ば。し。の。參。軍。たり。よ。件。の。馬。謖。罪。有。けれ。ば。諸。葛。武侯。と。な。り。ち。馬。謖。を。誅。して。その。罪。を。糺。し。又。陳。壽。が。父。の。頭。髪。を。剪。て。僅。よ。命。と。助。さ。り。加。之。孔。明。の。子。の。諸。葛。瞻。の。常。は。陳。壽。を。輕。せ。し。か。ば。ふ。か。く。これ。ら。の。事。を。恨。み。て。漢。よ。ば。い。た。く。貶。して。淺。ま。い。げ。よ。書。ま。る。し。又。孔。明。が。傳。を。作。り。て。諸。葛。亮。の。連。年。衆。を。動。し。か。ら。露。バ。かり。も。功。な。し。こ。の。武。畧。あ。る。もの。よ。あ。ら。せ。と。讒。

きり。晋書よ出ッ。又世説新語補か、れバ三國志の。妬忌依怙の筆よ成るものかれど。その文をのみ變して。理義と
 紙漏の部の注これよ由る。曉らざるもの多かり。縦通俗三國志とも讀むもの。正統。閔運。借國の別あるををるべし。正統との。昭烈帝の
 とさ。漢の帝親よして。絶たるを繼ぎ。魏賊と討玉ふといふ。開運との。司馬氏の魏よ代りて。天下を有といふ。これ
 を正統といひざるよし。漢の位と篡たるよのあらねど。その奸惡の。曹操父子よ劣らぎ。されば天下と有よ及て。
 世上一日も安からざりき。故よこれと閔運といふ。又借國との。曹操の奸雄よして。漢室と倒し。曹丕よ至りて。獻
 帝と追ひ失ひ。天子の位と篡といへども。全く四海と有得。故よこれと借國といふ。殷の夏よ代りて立。周の般よ
 かりて立。漢の秦楚と討亡して立。光武の王莽と誅して立。昭烈の曹操と討て。西川よ帝たるるとき。みな正統の天
 子とこゝろ得べし。まかれバ魏の賊なり。曹の魏の惡よ代るもの。吳の論せるよ及べ。以上金聖歎の。大日本
 の神代より。百万載の今よ至て。革命の時なし。萬國の内。又有がたくも。いと貴き大御國かれバ。他の國よ比へ
 たし。頼朝卿武家の棟梁として。六十余國の摠追補使となり玉ひて以來。僅よ四十余年。父子三世よして。北條の執
 柄の世よつりかり。北條亡びうせて。又新田足利とわかれたりき。まかれども。義貞朝臣ハ。とやくうせ玉ひて。
 子孫もあるよかひなきの。とく在れども。彼正閔の讀よよりて評するときは。新田殿ハ。武臣の正統よして。室町家ハ
 閔運なり。且楠正成ぬしの。誠思よして。武畧よ長トたる。之を孔明よ對すれば。劣らず勝らぎ。ざるを近屬京洛の
 大儒先生の。いたく孔明を嫌ひたりとなん。いまだその説と聞るといへども。元人の論議よ本づきざるよや。彼元人
 の評よ。玄德とやく。獻帝の子孫を立て帝とし。その身の丞相となりて。曹操を討バ。漢のふたよび興るべかり。よ。
 孔明のこの理を。まらざるものよあらざ。まりつよ玄德を推して。天子の位よ即たりし。眞の忠臣といひがたしと

いへり。理りあるよ似されども。この後人机の上の議論といふべ。前よもいふごとく。昭烈帝ハ。漢の景帝の玄孫
 よて。中山靖王より出玉へり。よしや獻帝の子孫を索て。天子とせまはしく思ひ玉ふとも。西巴の邊土よして。中原
 へ遠し。まかれバ人と許都の敵地へ遣して。これを索るよよしかるべし。當時の勢よを推量るよ。このとき昭烈の
 齡傾き玉ひぬ。とかくとる程よ。昭烈別玉ひあ。誰か漢の天子あるををるべき。これ孔明が。推して昭烈と。漢帝
 と仰ぐ所以。彼項梁が義帝を立て。楚の後と稱せし。日よ同じて論ぜべから。光武の王莽と誅して。漢朝を再
 興玉ひし。昭烈の曹操と討て。漢の位を存一玉ふとおあじ。されバ高祖のこれと創玉ふ所正統よして。子孫のこ
 れよ繼ところ又正統たり。か、れバ昭烈のさら。孔明よかいても。又後世よ。一言を加るとあかるべし。國史の
 とふりたれば。始くいはず。凡軍記小説と讀もの。大かたの成敗よまがひて。理義よこゝろと留むるの稀。後鳥
 羽院の。いかよもして北條義時を滅して。世をむかしのごとくよ御や。と思食たち玉ひよれど。從ひ奉る武士の
 多からぬ。北條が武運よまだよ、盡。いひがひなくうち負玉ひて。三皇の。遠き島々へ遷され玉ひよ
 れバ。承久記と讀もの。只、後鳥羽院の。よしなきとまいたし玉へりと思へり。かくて義時より八世の孫。高時入道
 が時よ至りて。後醍醐院。潜よ後鳥羽院の。志をつがせ玉ひ。高時と誅滅して。むかしの世よあさばやとして。その
 事かもひ起させ玉ふ程よ。一旦沈落し玉へども。北條が武運よ、盡されバ。いく程もあ。御本意を遂玉へり。是
 後鳥羽院の。意慮短くて。後醍醐院の。謀畧長させ玉ふよのあら。成と敗る、の時連よあるのみ。まがるよ大平
 記と讀もの。いみじく帝の思召たち玉へりとおもへり。もし後鳥羽院と不奉らバ。又後醍醐院とも不奉るべき
 に。とじめの北條よ意をとめ。後よの官軍へ意をよする。只その成敗よのみ眼うつりて。理義のよる所よ心づか

となりぬ。いかよせんと思ひけるが。信と案じ出したる事ありて。この度射んとする矢頭に。唾と吐懸て。おなじ矢所を射たりける。この矢は毒と塗たる故まや。又おなじ矢所と。三度射たりける故まや。この矢眉間の真中を徹りて。喉の下まで。羽ぶくら返てぞ立たりける。二三千と見えたる焼松も。忽地に滅て。嶋のごとくにありつるもの、倒るゝ音。大地を響したり。立よりて見るも。果して百足の馬蛇。龍神のこれを歎びて。秀郷をさま。又款待けるに。太刀一振。巻絹一。鍔一。頭結たる俵一。赤銅の撞鐘一。と與て。以邊の門葉。かならず將軍なるもの多かるべしとぞ示しける。秀郷都に歸りて。この巻絹を截てつかふも。盡ることなし。俵の中なる物を。取れども。つぎざりける間。財寶倉は満て。衣裳身は餘れり。故にその名を俵藤太とぞいひける。鐘の梵磬の物なればとて。三井寺へこれとたてまつる。云々といへり。この怪談。既は故事となりしかば。世俗耳熟て怪ます。此條の虚實。俗説辨といふものも。粗載たりとおぼへしが。それより只湖水の底。龍王城のあるべき理なきよ。のみ辨じたり。いかれども彼俗説辨を。観ざるもの、多けきまや。吾儕の宮書附。龍宮入の三字を加へるか。山椒入のあらすやとて識者の爲。笑きたり。これも彼曾我十郎の小袖の。衝を縫したる。異ならず。不破の關の板廂。月の漏を賞観するも。賓客を疑待さんとて。新又替かえて。興と失せし白徒の。今も亦さきよのわらせ。さらばまづ。龍宮城といふもの、わりなしの事よりいふべし。といへば。この孔明が陣大鼓の似せ。いと耳熟たる物語まき。衆皆聞まほし。聞まほし。と回答つ。或は蠟燭の真と剪。或は茶を汲てさし出し。講師と管待こそとかりけれ。

依藤太の龍宮入の弓袋の下

弓袋の下のうへと。聞んといふもの多るる。精まて。まづまづやのよ。一碗の茶と喫。襟かきわひして組なほす

小膝扇を衝つとまづ。童の弄物。婦人衣裳のもろとも。燈燭の下居よりんとて。席のすゝむをまらざりたり。當下弓袋聲とふり立。なて彼秀郷ぬしの。湖水なる。龍王の爲。射て殺せしといふ。巨蜈蚣の事を取て。世俗附會の説をなし。件の蜈蚣。近江の三上山と。七圍半まきなりし。三上山の。石部と草津の間。六地藏と唱る村里より。二十町ばかりあり。この山の巔の。凹なる處は池あり。又麓は殿穴あり。堀門の僅は二尺ばかりあり。内は究めて廣。一名を蜈蚣山といふ。いさも蜈蚣多のりなんといへば。土老の頭を掉。むのよりいふ蜈蚣山。三上山のとみならず。瀬田より一里ばかりに小山あり。秀郷は射らざり蜈蚣。こゝをりしといきまき。當時は眼前。見りしごとくいひ諺へど。彼軍記の。比良の高峯の。かよりとあると。ごも知せえて。蜈蚣の古蹟三味する。いとくをさなき心も。只頭は我と推せ。諺ふとも多るるべし。され秀郷ぬしの。蜈蚣射るとありと云ふのあらせ。其弓矢もわりぬべれと。湖水の底は。龍宮のありし。その龍宮といふ所。湖水の中は。其處を攻て取らんとせし。蜈蚣も亦なしとすべし。何をもて湖水は。龍宮なしといふあらば。和漢の俗説も。蒼海の中こそ。龍王宮ありといふあれ。そのるを近江の湖水。海へつゞきさる入江もあらせ。もしこの湖水は。湖水相應なる。龍宮城ありといひ。諏訪の湖水も龍宮あるべし。諏訪の湖水も龍宮あらば。印幡の沼も龍宮あるべし。かの龍宮あり。出店あると聞され。いとおぼつかなきことならせや。さの龍王宮といふ所の。唐山の俗も公然と。常は口順とぞと見えて。彼處の博士のいひ。事あり。蘇州の東と。海は入ると。五六日が程よして。小さな島あり。潤百餘里が間の。海水みな濁れども。ひとり。このところの水清くして。浪高きと數丈なり。こゝより常は海上は。紅光のごとくあると。見る事あれとく。舟人あへて近づかき。これ龍王城とぞいふなる。まかも西北の塞外にして。

龍も請きて。巨蜈蚣と射さりしといふ物語も。本づく所なきよしもあらせ。唐山の小説は。唐の敬宗の寶歴年間蔣武といふもの。射獵をもて業とぞ。されば弓を携。矢を挟み。熊羆虎豹などを射る毎は。並に應じて威。斃せどいふもの奇し。かくて一夕忽地に。門と叩くものありたり。意より見せ。一の狸々。白象に跨て来たり。蔣武素より狸々の。よくものいふをしりてけき。出てその故を問ふ。狸々答て。この象に。大なる怨のい。目がよくものいふことを。知て。目れとかく負て来て。その趣意と述よと。この山の南。二百餘里にして。いと大やかある巖穴あり。その中。巴蛇の。長は數百尺なるありて。その眼の電光のごとく。その牙の利劍のごとく。若象のこのはとりを。過るものあるとき。威呑噬と。既に數百疋に及べり。今君がよく弓ると去る故に。この愁訴を抵そのみ。願ふのこきが響を射て。この愁を除き玉の。長く高恩を忘せしといふ。時に象の跪きて。坐し涙を沃ぎか。狸々又いふや。君ゆくことを許し玉の。とやくまの象に跨り玉へとして。蔣武聞て感激し。毒をもて矢を淬し。象に跨てゆく程に。いひつる山の巖の下に。あやしき兩の光ありて。數百歩の外に散徹す。狸々これと指して。巴蛇の目ありとをしゆ。蔣武やがて弓は矢郊ひ。よつ引て兵と射る。一發してその目を射貫きつ。象は忙しく。蔣武を負て走り避る。大蛇の穴の中より轉出て。苦むと限を。かくの數里が間の林木。焚るが如く覺たり。さて且して。穴の側又往て窺るに。巴蛇の既死して。象の骨。積つて山の如し。浩處。象影聚來て。おのく鼻とめて。紅牙を捲とりて。これを蔣武に献れ。蔣武の多く。象牙を獲て家かへり。大は資産を有ぬといへり。是は山海經に。巴蛇の象を食ふ。三歳よし骨を出す。といふ本きて作り出せし。物語との聞ゆれども。象のものいひがさきゆる。狸々を備ていするといふとき。大は趣あり。且二百餘里。六町一里千の山中。又到りがさき所あり。この蔣武と。秀郷朝臣とし。象

と龍とし。狸々と龍の小男も化たりとし。巖穴と湖水とし。矢は毒を淬せしといふを。鐵は唾を吐かけたりとし。象牙を卷絹。俵。鐘。大刀。鎧として。龍宮城一條の物語は作りかへたるなるべし。まかれども湖水の底に。人の往來をべき處ならね。前の小説ならべ評せん。いと淺くか。聞ゆれども。作意なきあり。秀郷朝臣の。左大臣藤原朝臣魚名公の五男。從四位下伊勢守藤成朝臣の曾孫なり。藤成の子。下野權守豊澤。その子下野大椽村雄。その嫡男從四位下。下野押領使。藤太秀郷。母は下野椽鹿嶋の女なり。秀郷そのとめ。下野の田原といふところに居玉ひし。田原藤太と稱せ。藤太の。藤原氏の太郎と略せり。或は大和の田原にて生じ。たりといひ。近江の田原を領したればともいへり。諸説一定ならざれども。秀郷の子田原千春。千春あるひ。何の書も田原とのみ書て。依と書るを見ね。地名なるよし。が。田原と依と書。字と借する。依と稱するは注釋せん。件の蔣武の。と思ひよ。さて龍宮城の怪談は出來。まのれども。依の和訓た。ら。たちとしの義よく。米を裹む。さら。あら。又米を裹。卷。楚。さら。和名せし。手束藁の畧なり。まのきども。いつの比よりの借用て。依の和訓。手束藁に當り。字書は依。悲廟の切音標。依。散。ありとあり。こきをたちとし。和訓して。畧して。いら。唱たるなるべし。か。さ。手束藁。依の字を當する。む。のし。の人の。に。又田原の假字。手束藁の義をとりて。さら。さら。の假名。あり。さてこの依といふ。苗字を。物語の主人公として。卷絹。大刀。鎧。撞鐘と獲。財寶倉も充滿。衣裳その身。あまり。作りし。秀郷朝臣。天慶は貞盛ぬし。翼て。將門と討滅し。弓矢もてその家。興し。され。大刀。鎧。その武を表し。卷絹。米。依。食を子孫。傳るを表し。撞鐘。武名。四海。鳴るよし。と。ま。か。れ。ば。原。寓。言。といへども。作意ある。あら。せ。や。世俗の常談。の。批。する。足。ら。ね。ど。正

いちして。某が穿る脚絆へ。石堂丸が高野詣と書したる紙牌をつけ。人どあるとも憂旅の。憂かりいと忘るな。と可憐な教訓を。手づからこれを取葛籠の。底へ藏めて玉入りし。年を経る随人も見れも。冥途の旅は赴きて。うつれバ變る世の中。縁故を去るものなく。遺る脚絆と紙牌を見く。好事の徒珍重し。こきなんむかし石堂丸。高野詣の脚絆なりとて。紫帛沙うやくしく。二重管を入しより。價貴くなりしかば。歴々の各位と。ひとつ質庫は膝とまじゆる。傍侍らしき不幸も。取といねば理と去るよしなき。世の常言も今ぞ身。思ひあはせる懺悔話説。面目なり。といひも終屯。逡巡すれば皆興さめ。思ひを咄と笑ひたり。當時見臺先生の。肩をよせ頭を傾け。寔は彼がいふとく。世は秘藏する古器きんどよ。かゝる錯悞のいくばくもあるべし。これよ由て彼を思ふ。重氏法師の物がたりも。世は傳るとくよいあらじ。去る人あらば説わかして。睡を覺し玉へかし。といひつゝ。坐上を見見せ。臘塗の筥は蒔繪して。淺黄縮緬の裯を坐したる。水晶の珠數をみ出く。呵とうち笑ひ。出家する身のものしく。事の虚實を論せん。嗚呼のまじき所爲なれど。その迷ひを解ざらんも。傍痛ければ己と得ず。大人氣なくも出たる。己は一逼上人の遺物にて。彼上人の一生。御手まつり侍りしかば。その世のといふもさら。往古の道徳さちの。うへをさへよくまれり。彼説經より作りたる。加藤左衛門尉重氏入道劉菴と。長銘打る物がたり。己の主と憑み奉りし。一逼上人悟道のこと。祈親法師の高野詣と。此彼撮合して作り出せし。中葉の小説。その淵源と尋ば。久明親王。鎌倉の將軍として。北條貞時執權よりしころ。伊與國の住人。河野通廣の二男。別府七郎兵衛尉通秀。といふ武士ありたり。通秀あるとき。妻と妾との双六盤。武家名傳記を枕とし。頭をさし合して臥する時。その髻小蛇とありて。噬あふを見く出家して。諸國を修行して。智真坊と號せ。德行究て高かり。か。道俗

ふかく敬信去て。一逼上人と稱したりき。かくて一逼上人の。伏見院正應三年。秋八月廿三日。攝州兵庫の觀音堂にて。迂化玄玉ひたり。享年五十一。と縁起を見えたり。この別府通秀入道一逼上人。加藤重氏入道劉菴と作りかえさるなるべし。又劉菴道心の子。石堂丸のひとり高野山へけ登りて。父を索するよしを作り出せし。祈親法師の事と取きり。元亨釋書十四卷之。釋の祈親の七歳にして父と喪ひ。十三歳にして。興福寺に入て。相宗と學べり。時よその母の疾。いと危きよよつて落髮と。まかきども母の病愈せ。遂にむなしくなりまれば。偏は法華經を持念して。父母の冥福を薦しかば。祈親といひし。かくて祈親の。六十といふとし。忽地と思ふやう。己の二親不幸にして。世を早く玄玉へども。子といふもの。己の外なきし。も。父母後世の苦樂とまらざり。孝子の誠といふべか。と殊志と勵まつ。や。て長谷寺を參詣して。通夜して七日。及ぶほど。第三日の夜。夢中。人ありて告ていふやう。汝父母の生處とまらんとあらば。とやく高野の金剛峯へ到るべし。と教しかば。祈親夢さめて。ふかく歎び。天の明ると俟て。紀州へといそぐほど。どかくしく高野山へ参りまたり。弘法大師の山と開き玉ひしより。こゝは八十餘年。堂宇既頽廢して。荆棘路を塞ぎると厭はせ。幸じて塔所に到く。又祈るとことめまましより。かゝり程。よ。有一日觀東の内室。みおいて。庭上。三莖の蓮花ありて。菩薩かの。二ツの花の中。坐し玉ひさる。一ツの花のいせだ開かせ。祈親拜手稽首して。菩薩の名號と問けき。對るものあり。この二大士の汝の父母なり。これ。是汝が年來。法華經讀誦の感應とまらべし。その開かざる。一ツの花の。汝が坐する處ぞ。と教玉ひしかば。祈親の感涙と拭ひあへず。さて。念願成就しつ。と頼母しくて。直に此山を留り。勉めて荆棘を伐らひをさ。修造を加えしか。莊嚴はじめに彌ましたり。されば高野山の再興。實に祈親が力といへり。こゝは祈親が七歳よりして父を喪



高野山こうやさん
石堂丸いしどうまる
又またととるるところところ



石堂母

ひ。十三歳の時。母も没しされば。後生の苦樂をまらんとて。法花經の持者とありて。祈親と名に呼れ。年経て高野山へ登りて。父母成佛の瑞相を見たりといふ。元亨釋書の趣を。密に寫してとる。石堂丸が父を索て。ひとりと高野山へ登るに。母公中途に病死せし。といとも哀れ作せし。この孝子の名を。石堂と名づけし。祈親法師が。塔所に到りしと云と。思ひよしふる歟。河野の孝靈天皇の後胤にて。姓の越智。又加藤の。頼守府將軍利仁の後胤にて。藤原氏なり。利仁の孫。吉信。加賀守に任せられし。藤原の藤。加賀の加の字を冠して。子孫加藤と號れり。その家も亦異なり。又彼重氏入道。刈萱道心と名つけし。筑紫の地名も象りて。菅家のかん哥のこゝろと思ひよしたる歟。新古今集。菅原贈大政大臣。刈萱の。關守にのみ。見えつる。人もゆるさぬ。道べなりけり。刈萱の關の筑前ありし。人もゆるさぬみちべと詠せ玉ひし。本つきて。刈萱道心が。その子石堂丸とまりながら。名告ありし。いふにや。か。れ。此物語の父母さるもの。祈親法師と一遍上人の。事跡はあらずして何ぞや。既よその綱源と論辨するとき。石堂丸の脚絆といふもの。世もあるべうもあらず。彼刈萱の親子地蔵の別に所以あることなりや。好事のもの。所爲なりや。それまで。考果さず。昔草紙物かたりと作るもの。あまり哀れと聞せん。却て人情をとり失ふもあり。よしや出家人ありとも。その子。いと孝心ふかくて。とる。と索來つる。情なく名告もあいで。いさく物をかもの。眞の出家といふべからず。彼西行法師。年を経て。妻も名告遭ひ。その女兒と共に住り。又讀書見臺子の論じ玉ひし。所領の地と捨。妻子を捨て。出家人とあるとき。佛の爲に忠臣ありとも。先祖の爲に不孝と。こ。是儒の道。遮莫佛法。子孫斷絶を宗として。生涯乞食をるもの。佛の道へ入らんもの。妻子と思ひ。爵祿は著さば。よしや形状の僧ありとも。心。大

盛衰記
院は在
位は禮
門は建
二人の
半者あ
り横笛
蓋と共
は容色
ありけ
り云々
人の名
と呼ぶ
めとこ
之は見
之は見

俗。かくのごとくもして。得道せしものを聞か。西行上人在俗の日。出家せんと思ひさどめさる。僅よ二歳をりける女兒。父の膝に携つ。抱れんとて泣き。さ。そのよこ。ろ。よく覺えて。ま。し。ち。も。あ。ね。さ。る。の。信。と思ひ。へ。と。や。う。凡。出。家。の。志。を。遂。げ。事。ま。つ。愛。惜。の。絆。を。斷。ち。眞。の。道。へ。入。り。の。さ。し。と。て。嬰。兒。を。地。上。に。投。退。け。躰。を。家。を。出。た。り。たる。走。利。火。宅。中。の。人。こ。こ。を。見。く。人。情。を。し。と。笑。ふ。べ。け。き。と。佛。の。教。の。後。あ。き。を。貴。し。と。又。眞。の。出。の。教。の。後。あ。き。を。不。孝。と。と。彼。是。鋒。盾。と。さ。る。と。かくのごとし。されば。とて年を経て。その子。名告ありさると。眞の出家といふ。い。あ。ら。せ。彼。齋。藤。時。頼。法。師。の。嵯。峨。野。の。奥。へ。隠。れ。し。と。美。女。横。笛。の。尋。ね。來。つ。る。よ。逢。り。し。と。刈。萱。法。師。の。その子。名告ありさるといふ物語。日とおおしくして論じ。南无阿彌陀佛。と説玉へ。聴ものおのく合掌して。南无阿彌陀佛と應々る。

昔語質屋庫上終

